

棚田学会通信

第6号 2002年2月15日

発行/棚田学会

〒184-8577

東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721

FAX:042-383-8614



豊後高田市大曲の棚田(撮影/海老澤衷)

石井先生にとってのワセダおよび国東

棚田学会理事 海老澤 衷 (早稲田大学)

先生が還暦を迎えられた際にまとめられた『私本塵芥抄』の最初に、かつて朝日新聞の夕刊に載せられた「胸突坂のキツネ」が収められている。その冒頭は、「ある秋晴れの日、久しぶりに「都の西北」早稲田から北に、神田上水を渡って目白台の台地へと歩を進めた。」とある。先生にとってはこの辺り一帯が幼い頃の記憶を蘇らせるどころ、すなわち故郷といってよい場所であった。そのため先生は学歴の上では、早稲田大学とまったく無縁の人なのだが、ワセダに特別な親しみを覚えていたようである。

1980年から大分県教育庁に勤務していた私は、田染荘(たしぶのしょう)という国東半島にある宇佐八幡宮の荘園を調査していた。この調査は、当時文化庁に勤務していた服部英雄さんの応援を得て、県立資料館の強力なスタッフに支えられ、学際的な調査へと展開を遂げつつあった。84年7月、先生に調査委員をお願いしたところ、

きわめて好意的なご返事をいただき、秋には「くにさき」の視察が実現する運びとなったのである。

11月14日に来訪され、17日には、大分県地方史研究会での講演「日本の中世都市一鎌倉と豊後府内一」をこなされて、18日に東京に戻られたが、この間宇佐国東地域のみを実に熱心に見て回られた。『私本塵芥抄』の年譜には、「以来、毎年、田染荘・都甲荘の故地を訪れる。」とあり、先生にとっても格別な印象をお持ちになったようである。こうして先生との本格的なお付き合いが始まったが、奇しくもこの年は、竹本豊重さんが史学会シンポジウムで備中国新見荘の画期的な報告を行った年であった。おそらく先生の頭の中では、新見荘と田染荘の復元的な研究が大きく羽ばたいていたと思われるが、地域の人の意見をじっくりと聞く態度をごく自然に保ち続けておられた。先生の博学にはおよばないとしても、何とかこの姿勢を学んでいきたいものである。



追悼・石井進さん

棚田学会副会長 石塚克彦（劇作家）

石井進さんともう飲めないなんて、どうしても心も身体も納得しない。

石井さんはリュックを背負ってよく旅をする。

私は“ふるさときゃらばん”などという、文字通り旅芝居の脚本・演出が仕事だから、年中旅している。旅には地酒と肴がつきもので、そこで見つけた酒を一緒に飲むと「いいですねエ、これイケますよ」などと、学者らしからぬ語り口で、その土地の話になる。石井さんと地方の話をするのはほんとうにたのしかった。

棚田サミットで、三重県の山奥・紀和町に行ったとき、宿で同室となり例によって酒となった。紀和町には赤木城という山城の跡があり、築城の名人と言われた藤堂高虎が手がけた、初期の城だそうである。これも石井さんから聞いたことだが、その築城にまつわる地元住民虐殺の話は、まるで白土三平の漫画・カムイ伝さながらの面白さで、時間を忘れ、しこたま飲むことになってしまった。

私がたまたま石井さんの文を初めて読んだのは、

芝居づくりの参考に手に入れた「山の民・川の民」という井上鋭夫氏の論文の解説であった。解説と言っても、石井さんのその文は十五ページもあって、ドラマとロマンに充ちた独特の世界があった。

私が「あれは面白いですねエ、とても東大の学者が書いたものだとは思いませんでしたよ」と言ったら、石井さんは嬉しそうな顔をされ、それから本を出すたびに送ってくれるようになった。

ひょっとすると私の面白がりようが、学者とは違い芝居や漫画を楽しむような調子だったため、石井さんも私と話すときは、私向けに、面白がって活劇のように話してくれたのかも知れない。ステキな人である。

柳田国男門下の民俗学者で日本画家でもある橋浦泰雄さんに、私は助手のように付いてまわり、水墨画を学んでいたことがある。そのことに石井さんは興味を持たれていた。石井さんが柳田国男の研究会に属しておられたのを知ったのは、ごく最近だった。御自分は言わなかったから。

石井さんを紹介されたのは、同郷の森山眞弓さん（現法務大臣）からだ。たしか当時・森山さんは文部大臣で石井さんは佐倉にある国立歴史博物館の館長をなさっていたと思う。森山さんの紹介は「この人に加わってもらったら、社会的なグレードもあがるよ」、そんな意味のことであったと記憶している。

その時、芝居屋の私としては、学者先生に力になってもらうことなどないだろうな、と思っていた。

ところがひょんなことから早大の中島峰広さん（地理学）文化庁の大島暁雄さん（民俗学）と一緒に棚田学会を立ちあげることになってしまい、その会長を石井進さんをお願いする羽目になってしまった。

実際、石井さんに会長になっていただいたら、これ以上ピッチカンカンの人はいない！でありました。

学会の会長ともなれば学術的な業績もすぐれたものがなければいけないし、その点、石井さんは申し分ないだけではなく、人柄がすごかった。だいたい学者・研究者という方々は、失礼ながら往々にして偏屈な方が多いと思う。だって、こだわりがすごいからめんどろな研究調査を根気よく追求し続けることが出来る訳でしょう。そういうた

ぐいの人が集まるのが学会なので、それがまとまってゆくには、石井さんのような、融通のきく、柔軟性と筋をわきまえた、幅のある人がいなければどうにもならない。

そのうえ、石井さんは山奥にある棚田まで、出歩くのを苦にしない。こんな三拍子揃った人は、めったに居るものではない。

棚田学会が立ち上がったのも、学会がこれまで仲良かったのしくやってこれたのも、石井さんが会長だったからだと思ふ。そして、石井さんが逝ってしまった今、これから、どうやってゆけばよいかと途方にくれる。

棚田学会の会員に、宮内庁の歌会始を仕切っていた中島宝城さんという歌人がいる。今は帝国ホテルの顧問をなさっていて、春と秋に日本中のとびっきりの銘酒を集めて、日本酒をたのしむ会を始めた。「春秋の宴」という。その会に石井さんと私はいつも同席し、たのしい盃を交わして来た。私たちの出席を中島さんも嬉しがった。

また「春秋の宴」の季節がやって来るだろう。そのとき石井進さんが居ないなんて考えられない。どこかの席から、変わった日本酒をくすねて来て、「石塚さん、これイケますヨ」などと注ぐにきまっている。

石井先生のお人柄

棚田学会会長代理 中島峰広（早稲田大学）

石井先生のお人柄について思い出すことが三つある。一つは、1998年11月に棚田学会を立ち上げるに当たり、高田馬場のふるきやら倶楽部で初めてお会いした時の先生のご挨拶である。その時、先生は若輩の私に心からのご厚情を示されながら深々とお辞儀をされたのである。高名な先生に対する処し方をあれこれと考え、かたく固まっていた私の気持ちはこの挨拶で一遍にほぐれ、立ち上げの話し合いは大いに盛り上がり、設立に向けて弾みがつくことになったのである。

次に思い出すのは、先生が棚田学会の会長に就任され、朝日新聞の「ひと」の欄に登場されたときのことである。愛犬に頬を舐めまわされながら目を細めて笑われているお顔の写真は、先生のお家での暮らしぶりがしのばれるもので、心に焼き付けられている。ご家庭への思いやりある振る舞い、そして穏やかで、あたたかくやすらいだ雰囲気の家生活が容易に想像できる笑顔であった。

いま一つは、先生の背中に常にあったリュック

である。先生は服装は余りかまわれず、背広の上からも平気でリュックを背負われて職場や会議、調査に出かけられていた。その出で立ちからは、まるで少年のような無邪気さとおおらかさを感じたものである。

このようなお人柄により、農学、経済、地理、歴史、土木、環境などさまざまな分野の研究者、中央省庁や行政のお役人、一般市民をも含む多士済済の会員を纏められて学会を発足させ、軌道にのせられたときに先生は急逝された。会員の皆が茫然自失、学会は頼りとする船頭を失ってしまったのである。

しかし、残された者は悲しみの中に浸ることはできない。学会という名の船を漂わせることなく、先生のご意志を引き継ぎ、力強く前進させなければならない。それがわれわれの責務であり、先生に対するなによりの供養である。先生やすらかに眠り下さい。合掌

「追憶二話」

棚田学会理事 山岡和純（日本農業土木総合研究所）

歴史や民俗学の全くの門外漢であった私を石井進先生に引き合わせてくれたのは、私どもには耳慣れぬ、中世荘園の田園景観が色濃く残る大分県豊後高田市の「田染荘（たしぶのしょう）」という名の地域であった。平成10年のことである。

この地域では、未整備なままの農地では機械化営農もままならず、営農労力負担の重さから、過疎化・高齢化の進展とともに耕作を放棄して荒れ放題となる農地が拡大していた。そして、隣接する地域で進展しているほ場整備事業（水田の区画を拡大・整形し、分散していた農地所有を集約化するとともに、旧式な砂利道や土水路を撤去し、新たに農道や農業用排水路など近代的な機械化農業のための基盤を整備する事業）によって、隣のムラが蘇ってゆく様を目の当たりにして、ほ場整備事業の実施を求める声が高まった。

地元としてはすぐにでも着工したい意向であり、そのために隣接地区の事業エリアの拡大手続きが行える期限切れが近づいていた。

一方、石井進先生を中心とする歴史民俗学者の間には、何とかこの景観と伝統的な生活空間を守っていけないかとの強い願望があった。

当時、農林水産省は、それまでの生産性の向上一本槍から転換し、初めて棚田を保全する目的の事業を創設し、その実施の初年度を迎えていた。前年度に同事業の創設を担当して4月から別の部署に移っていた私を早稲田大学の海老澤教授が訪ねてこられた。後に海老澤先生のご紹介で石井先生と初めてお話しする機会を得た。予備知識のない私は、気さくなお人柄の石井先生に惹かれ、一行政官としての思いの丈を存分にお話しさせていただいたが、これほど高名な学者でいらっしやることをあとで知り、赤面の思いであった。

海老澤先生から相談を受けた私は、期限が迫っているこの件は、大分県の耕地課に直接状況確認をとって、県に先生方からの相談に乗ってもらうよう頼むのが一番良いと考えた。大分県耕地課はこの案件を真摯に受け止め、地元の調整に入ってくれた。そして、一般的なほ場整備事業ではなく、農業生産基盤の整備を行いつつ中世荘園の田園景観をいわゆる「エコ・ミュージアム」のような形で保全・紹介することのできる「田園空間整備事業」という農林水産省の新たな事業制度を活用することとなった。

石井先生の思いが詰まったこの事業は、県営田園空間整備事業西高地区として平成12年度に整備構想の策定に着手し、現在まさに佳境に入っ

ていると聞く。

その後、石井先生は棚田学会会長にご就任され、私は理事の末席を汚すこととなった。

平成11年度に、私は山口県庁に転出した。

山口県は、本州の西端に位置しているが、大内・毛利・明治維新という重みのある歴史と豊かな山海の風土を有し、瀬戸内沿岸の都市地域への人口集中とそれ以外の過疎化に悩む農漁村という、まさにわが国の縮図のような県である。わが国全体がそうであったように、人々の目は生活に便利な都市部に向いていたが、バブルの崩壊後都市の発展の限界が露呈し、価値観は混沌の時代を迎えている。農業農村が見直される時代が近づいている。

この山口県の北西端に、向津具（むかつく）半島がある。日本海に突き出したこの半島は、観光地からもはずれた交通の不便な農漁村で、多くの県民にその存在が忘れられかけていた。県の行政としても、地滑り常襲地域として防災関係者の守備範囲となっているに過ぎなかった。

私は農水省で棚田保全の事業を手がけたときから、この半島を訪れたいと思っていた。500ヘクタールに及ぶ大小2万枚の棚田、2千カ所のため池が山の中腹から日本海までひしめいていた。そして夕刻には棚田の水面に沿岸の鳥賊釣り漁船の漁り火が映える。私は棚田の景色にではなく、この地域に生きる人々の営みに感動した。新しい時代の道標として、この地域を是非、県民に、また全国の人々に紹介したいと思った。

棚田学会の石井会長に相談した。石井会長は、イベントの共催とパネルディスカッションのコーディネーターを快諾してくださった。石井会長のリードによる議論も素晴らしかったが、何よりも地元で自信が芽生えた。県民の目もこの地域に向いてきた。この時、プライベートに石井先生を歴史の町萩市にご案内した。山間農村の微地形や石州瓦の朱屋根もご覧頂けた。石井先生はこの地域に強い関心を寄せてくださり、後に長州萩の指月城の古絵図が掲載されているパンフレットを送ってくださった。

これをきっかけに、県民の向津具半島を見る目が変わった。二井知事は2003年にこの地域に在京の外交官を招き、地域の人々がおもてなしをして、一緒にコメ作りを行う「米米フォーラム」を開催することを発表した。石井先生の思いがまたひとつ、人々に受け継がれている。

石井進先生追悼文

棚田学会理事 千賀裕太郎（東京農工大学）

研究分野が異なる私にとっての石井進先生は、棚田学会の会長としての石井先生でした。数々の要職を務められ、執筆研究活動に多忙を極めるお立場にもかかわらず、石井先生は棚田保全に並々ならぬ関心を注がれ、この学会の運営に多くの時間を割いて下さいました。先生は2カ月に1回の理事会はもちろんのこと、学会主催の行事にもほぼ参加され、学会長として文字通り学会運営の陣頭指揮をとってこられました。石井先生なくして棚田学会の今日の姿はなかったであらう。

棚田保全への石井先生の高い情熱は、先生の御高著にも著されております。『中世の村を歩く』（朝日選書、2000年1月）では、グラビアに棚田の写真（豊後高田市田染地区、海老澤衷氏撮影）がさがられ、この写真をひいて本文では「なつかしい景観、日本のムラの原風景の一つが広がる。人々が永年にわたって自然に働きかけ、作り上げてきた、あたたかみのある景色なのだ。」「しかし年々耕作面積が減少しつつあり、まさに“消えゆく棚田の風景”であった。実は昨年8月、棚田を学際的に研究して、その保全につなげようとする棚田学会という新しい会が設立され……」と述べ

られています。

私自身は農学部出身で、歴史学で一般に用いられている研究手法については全く分かりませんが、石井先生が好んで農村地域に赴き、田圃や水路を観察し、土地の古老や水利に詳しい地元の方から謙虚に学ぶ姿勢は、私の恩師や先輩たちから授かった研究手法にきわめてなじみやすいものです。「もし地図と現場の地形とが食い違っていたら、いさぎよく地図の方をこそ修正すべきである」と一般に言われる一つの学問的立場を、学際科学であり地域科学でもある『棚田学』の研究規範として共有すべきことを、石井先生は示されたのではないかと思います。

地域にある事実とそこに息づく智慧に謙虚に学ぶ姿勢を大切に、棚田学会を大らかで楽しい学会に発展させる活動を通じて、“あたたかみのある”農村景観の保全に積極的に寄与してゆくことこそ、石井進学会長が私たち学会のメンバーに託されたことではないでしょうか。

棚田学会はいつまでも石井進先生とともにあります。

共通の知人

棚田学会理事 篠原 孝（農林水産政策研究所）

日本史の石井先生の専門分野（中世日本史）と私の仕事（農林水産行政）との間には通常は共通なことは何も見当たらない。それにもかかわらず、私が「棚田」を通じて先生の訶咳に接する機会を得たことは、大きな収穫であった。ただ、私は先生を棚田の保全に興味を持っている少々変わった元大学教授としか思っていなかった。私にとっては、肩書きなど無関係だったからだ。

何回か理事会でお会いするうちに、先生の方から私の郷土（長野県中野市）の歴史家湯本軍一氏のことには話が及んだ。私は週一回発行される地元紙「北信ローカル」をずっと県外購読し続けているが、湯本氏はその常連執筆者であった。私もファンの一人であり、いつか湯本氏の正月特集を石井先生にお渡ししたこともあった。そのうちに、高校の友人でやはり歴史学をやっている井原君のことにも話が及んだ。先生は、日本の第一人者であるにもかかわらず、あちこちの会合にも顔を出し、いろいろな人たちの論文に目を通されている

ことが自ずと知れる出来事であった。月並みな言い方をすれば、「顔の広さ」であった。そして、その延長線上に棚田学会の会長があり、本当にふさわしい人に会長になっていただいていると安堵した。

日頃ぎすぎすした雑事におわれる私にとって棚田学会のゆったりした会合は、いわば心のオアシスである。理事会も編集委員会も欠席がちであり、大した貢献はしてないが、いろいろな異なった分野の方々に接し関わることが楽しく、学ぶ所が多い。そしてその代表格がいつも笑顔を絶やすことがなかった石井先生であった。

亡くなられた後、全国紙が追悼文を掲載し、私ははじめて先生の学者としての業績の一端を知ることとなった。そこにはあまり触れられていなかったが、石井先生の場合は他の教授の方々にはない大功績が一つあり、棚田学会への情熱こそ特筆されるべきものと思う。

石井先生と棚田学会

棚田学会理事 大島暁雄（文化庁）

平成8年9月、佐賀県西有田町で開かれた第2回棚田（千枚田）サミットで、私は棚田への文化的側面からの取り組みの必要性を強く認識させられた。そこで『月刊文化財』誌に棚田特集を企画することとし、当時、大分県の田染荘の棚田保存問題に深く関わっておられた石井先生を訪ね、巻頭文への執筆をお願いした。先生はこの趣旨に積極的に賛意を表され、ご自身の執筆はもとより、特集の構成から執筆者の選定にいたるまでの確なご指示を下された。棚田を通じた先生と私との付き合いの始まりである。

その後、私は、平成10年に安塚町で行われた第4回棚田サミットへの向かう道筋、同乗させていただいた車の中で石塚克彦氏から棚田学会設立の相談を受け、準備の窓口を引き受けることとなる。引き受ける決め手となった大きな理由の一つには、この時の印象が基になり石井先生の後ろ盾が確信されたからでもあった。そこで私は、その年の11月6日に行われた「棚田学会立ち上げに関する打

合せ」で石井先生に参加していただくことを提案し、そして、先生も予想通り積極的に参加意欲を示されて、以後のご活躍に連なった。

先生の学問や地域に対する想いのなかで、棚田がどのような位置を占められていたのかはとも思い及ぶところではないが、今回の訃報が他に先駆けて直ちに棚田学会事務局に伝えられたのも、日ごろからご家族に棚田学会の楽しみを語られ、直前に迫った安塚町の棚田見学会を心に掛けておられたからだと思われ、先生のご広範なお仕事の中でも、棚田の占める位置が決して小さいものではなかったことを改めて感じた次第である。

棚田が、国際関係や農業政策等の面からのみ注目され、文化的側面からの取り組みの遅れが目立つなかで、歴史学者石井進先生の占める役割は誠に大きいものがあつた。今更ながらにその存在の大きさを実感しています。先生、ご冥福を心からお祈りします。

追悼 石井進先生

ひらつか順子（劇団ふるさとときやらばん）

ふるさとときやらばんの創立間もない頃、福岡県星野村の棚田と出会い、見たこともない光景に驚かされ、圧倒されてしまったことは記憶に新しい。

それから10年後、その棚田の前に送電線の鉄塔が立ってしまった。同時に荒廃する棚田が目立つようになってきた。棚田が失われる前になんとかしなければと、”全国棚田サミット”を企画した。当時、参議院議員の森山真弓さんから「そんなに熱心にやるのならこの方に相談してみたら」と、佐倉の国立歴史民俗博物館の館長をなさっていた石井先生をご紹介いただき、さっそく佐倉におじゃましたのが、石井先生との出会いである。

「棚田は縄文時代にまでさかのぼり、棚田のあり様、分布などの歴史は人々の生活文化を知るには大事なものです。学問的研究も立ち後れている分野かも知れない……。」と、石井先生からお話

を伺って、改めて棚田の持つ意味や役割に気づかされたのでした。また、国東半島にある棚田が荘園の名残であることもお話しして下さった。実のところ私は石井先生は、農業分野とはあまり縁のない方だと思いこんでいたので、お会いするまでは、歴史で有名な先生が『棚田』に興味を持っていただけるかどうか、半信半疑だったのだが……。

さらに4年後『棚田学会』設立時には、学会長を引き受けていただくことになり、様々な意見の飛び交う中、終始ニコニコと学会を引っばって下さった。勉強会、各地の棚田調査、ふるさとときやらばんのミュージカル観劇と、ご自身の研究や出版の合い間をぬって出席していただき、観劇後の宴席も楽しんで下さって、私までも幸せな気分にならせていただいた。石井先生の思い出はつきません。

“生活のかかっている棚田”に衝撃

近見康子（神奈川県平塚市在住）

昨年10月27日、28日の2日間、現地見学会に参加させて戴き、山頂近くまで耕し、維持してこられた安塚の先人たちに、頭の下がる思いでした。

雪国での水の確保のあり方に、秋口から水を張ることを聞かされた時、どういうことなのか理解できないでいたことが、現地を見ることにより、畦を塗り、地面をならし、水を張り、すぐにでも、田植えができるように、土を軟らかくしておき、春を待つことを知ることができました。

また、休耕田が多くなり、ススキの白穂美観が悲しげな風情に感じさせられ、後継者に苦勞していただけることもわかりました。

地元の方の話の中で、“生活が、かかっているのです”の一言に、衝撃を受け、ほとんど高齢者の

方々で、農作業を維持してられる姿、保全の為の工夫もなされているとは言え、まず、労働力の確保が切実なことも身にしみる思いでした。

今回の現地見学会が、温暖な傾斜の田畑の維持に対し、雪国の棚田の維持の御苦勞の差を思い知らされ、一時的なオーナー制度の補足では、継続的な農作業には、焼け石に水のように思え、人手の問題が、何とか解決の道はないものかと、心を痛めている、現在の心境です。

初代会長の故・石井先生のお言葉に、「現実的な棚田保全に結びつく会に」とのことがありましたが、農耕に携わる人を確保してこそ、科学的研究、工夫も活かされることではないかと感じております。

星野村棚田調査体験会報告

棚田に鎮座する巨石と辣蕪

青柳富雄（福岡県太宰府市在住）

星野村は穏やかな日差しのもとに菊が咲き誇り、稲は刈取られ藁が伸びていた。教育委員会に着くと二人の学生を紹介され、うち一人は海外からの留学生と言う。棚田は外国人をも魅了する力があるのかと思いつつ早速調査手順を聞く。水田・畑など土地利用状況を確認し地籍図に記入する作業である。二人の学生と共に中渡瀬の棚田へ送ってもらい、それぞれ調査範囲を分担して行うことにした。

野紺菊の鮮やかな青紫色が印象的な農道や畔道もあれば、開墾の際に出てきたのか石を敷き詰めた坂道もある。急勾配故に土砂の流出を防ぐためだろうか、豪雨のときは水路の役目を果たしているようである。また、地籍図に未登録の新設道もあり戸惑うが、他の調査のためか水田にはまばらではあるが、一m程の竹が立ててあり、その先端には番地その他が記入された付け紙が挟んであり大いに助かった。

様々な道を辿りながらの調査である。ひと際広

い田の中に巨大な石が鎮座している。この巨石は田植えや収穫の棚田の賑やかなときは勿論、その歴史を見詰めていたに違いないと思いながら次へ進めるが、細長い一畝の管理の行き届いた辣蕪（らっきょう）畑があり老人が追肥作業をしている。冬に向っての力付けだと言う。辣蕪への優しい心遣いと思いながら「此处は何番地ですか」と尋ねると迷いながらも答えてもらった。地籍図と一致しており棚田への愛着の現れだろうと感心する。石積棚田の農作物に対する効用などの話を聞き、次へ向かう。

棚田にはよく似合う曼珠沙華の球根が掘り出され哀れな姿となっているのに出会う。畔からはみ出し稲の領分まではびこったのかと思いつつ巡らしながら調査を続けるが、日も傾き一日の体験会を終える。

棚田農業の現状を少しでも理解し今日の参加が微力でも、その保全と継承に結びつくことを信じて帰路につく。

会 告

平成14年2月1日

棚田学会理事の改選について

棚田学会会長代理中島 峰広

本学会は平成14年7月1日をもって創立4年目を迎えます。これに伴い、棚田学会会則第7条の規定により、現在の理事の任期が終了となりますので、新たな理事の選出を行う必要があります。つきましては、新理事の選出の手順を、棚田学会の全会員から理事への立候補及び推薦を募ったうえで、その結果を基に現在の理事会で理事候補者を推薦し、次期総会で選出いただくことといたしました。

このような結論に至った経過といたしましては、本会はまだ創立後日が浅く、また、学会員の所属や専攻分野等が多方面に及ぶことなどから、学会員相互の連携も十分とはいえない状況にあるとの現状認識を基にいたしております。

会員諸氏におかれましては、この間の状況をご賢察の上、次期理事の改選方法については是非ともご理解を賜りたく、お願いを申し上げます。

おって、棚田学会理事への就任を希望される方、または理事に相応しいと思われる方について、下記により、自薦・他薦を問わず積極的にお申し出下さるようご案内申し上げます。

記

1. 立候補及び推薦届の記載事項（様式自由）
 - 1) 理事候補者氏名（自薦・他薦含む）
 - 2) 候補者の住所・職業・生年月日
 - 3) 候補者の専門分野及び主たる業績等
 - 4) 立候補・推薦理由（抱負）
2. 届出方法
 - 1) 封書にて郵送のこと
 - 2) 締め切り期日 平成14年3月31日（当日消印有効）
3. 宛 先
棚田学会事務局
〒184-8577 小金井市本町6-5-3 ふるさときゃらばん内
電話) 042-381-6721

お知らせ（詳しくは別紙案内にて）

先に会員宛の封書でお知らせいたしました、平成14年4月20日～24日にバリ島で開催する「第5回棚田学会現地見学会・研究会」につきましては、会員の皆様の積極的なご参加を得て、参加希望者が20名の定員となりましたので受付を締め切らせていただきました。

なお、この企画に関連し、右記の通り、バリ島の棚田に関する談話会を開催いたしますので、ふるってご参加下さるようご案内申し上げます。

第5回棚田学会談話会

講 師：大橋 力（おおはし つとむ）
千葉工業大学・教授、農学博士
（別名：山城祥二 芸能山城組組頭）
日 時：平成14年3月16日（土）午後3時から
会 場：農林水産政策研究所分室
東京都千代田区霞が関1-3-2郵政事業庁舎2階
会 費：無料（非会員は資料代として500円が必要です）
お申込：棚田学会事務局 電話：042-381-6721

編集後記

本号は亡き石井進先生に対する惜別の言葉に満ちた追悼集になりました。あらためて先生のご冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

編集部